

都留市史

資料編

都留郡

村 明 細 帳 集
村 明 細 帳 集

Ⅳ 森嶋弥十郎其進

松平伊予守定能の私撰とされる、全巻百二十四、甲斐の国の地誌『甲斐国志』は、その実、国中は内藤清右衛門禹昌、村松弾正左衛門善政によって、都留郡は森嶋弥十郎其進によって編纂されたものである。

都留郡を担当した森嶋其進は、都留市の前身である、都留郡下谷村の出身であること、および、本絵図編の大半が『甲斐国志』の調査に用いられ森嶋家に所蔵されてきた村絵図・村明細帳を使用したことから、以下森嶋弥十郎其進について、佐藤八郎氏校訂の雄山閣版『甲斐国志』第一巻に記された解説中森嶋弥十郎略伝を参照して略述する。

森嶋弥十郎其進の「其進」は諱、いみな通常音読みで「キンシン」と呼びならしているが「あざなモトノブ」であろう。字は子与、弥十郎は通称で号を桂園という。

森嶋家は藤原を本姓とし、先祖は大和の豪族で、代々朝廷に仕え、南北朝時代には護良親王に仕えたが、親王が足利氏に討たれるに及んで、都留郡加畑村に逃れて土着し、郷士となったといわれている。江戸時代に入っては、加畑村に限らず、近郷にまで土地を所有する大地主でもあったが、絹織物の商も手がけ、家すこぶる隆盛であった。名主伝兵衛のとき、長男利八は加畑村の生活にあきたらず、家を弟に譲って谷村に出て、表向きは農業であるが、その実「島屋」を屋号とする絹織物の問屋を開業した。絹商としての利八は商才を発揮して、九条家御用商人の株を手に入れ、諸国の関所自由通行を許され、江戸・京都のみならず、上方・西国に販路を開き、巨富を築いた。

其進の経歴と事績 弥十郎はこの島屋利八の嫡男として生まれ、神童としてさわがれたが、生来学問好きで、父を助けて家業にいそしみながらも、ひまを見つけては机に向い、ひと時として書を離れることはなかったと伝えられる。

弥十郎二十二歳のとき、父の死にあい、意を決して家業を弟理八に託し、人を介して昌平黌に学ぶこととなり、林鳳谷、関松窓、市川寛斎などの優れた師のもとで、朱子学や書道の研究に没頭することとなった。時に弥十郎二十三歳であった。

在学中、僧雲室鴻漸とめぐり合ったことは、弥十郎にとって単なる親友としての交わりのみならず、生涯にわたってお互いに大きな影響があった。雲室は信州飯山の人で、安永七年（一七八七）に昌平饗に入塾であるから、弥十郎より八歳年長で、昌平饗にあっては五年上の先輩であった。鴻漸は法名であるが、後に了軌と称している。字は元義という。学を修めて後も、入塾者の紹介者として名を連ねているので、昌平饗へ出入するうちに親交を結ぶようになったものと思われる。弥十郎は後に、自身の菩提寺である新倉村（現富士吉田市）の正福寺の僧として招いたり、江戸西の久保の光明寺を再興して中興開山として入院させたりしている。

この雲室が残した弥十郎への祭文と雲室随筆とが、『甲斐国志』編纂前にも国志編纂の動きがあったことを伝え、後年国志編纂過程を知る上で重要な資料となったのである。

弥十郎が昌平饗に学ぶようになった天明三年（一七八三）にはじまる凶作は、長期化して大飢饉となった。学を修めて郷里に帰ったが、郷里郡内も民の飢餓状態は極限に達していた。この時、弥十郎・理八兄弟は、飢民救済を決意したのであった。代官所に届け出た上で島屋の店先に救い小屋を設け、蔵を開いて米粥の炊出しを行ったのである。施米総量は三九〇俵に及び、そのため谷村近郷に餓死者がなかったといわれるほどであった。天明八年（一七八八）のことである。このときの義挙に沸然として俚謡が流行した。「恋の今来屋（金の今来屋とも）、なさけの島屋、こころ邪険な油藤」。情の島屋とは勿論森嶋家である。この義挙を賞して代官所より銀五枚が褒美として贈られた。

穀商でもないのに多量の米の所有は、島屋の豪農ぶりを示すものであるし、利にさとい商人としては、飢饉はまたとない儲けの機会であるにもかかわらず、かかる義挙に出たことは、其進の性格が根からの商人ではなかったことにもよるのであるが、昌平饗で学んだ儒学の思想、あるいは、雲室から受けた仏教の慈悲心が、其進の人生哲学として大きく影響していたのではなからうか。

このことがあって間もなく妻をめとったものと思われるが、寛政三年（一七九一）まだ二十歳という若さで、一子も遺すことなくこの世を去った。妻に先立たれた弥十郎は、共に働いてきた弟理八に家督を譲り、理八の後見しつつ、自らは朋来園と名づけた新居に移り、文人墨客の士の来遊を待った。「朋来園」とはいうまでもなく「学びて時にこれを習う、また悦ばしからずや。朋ありて遠方より来る、また楽しからずや」という「論語」学而篇の孔子のことばからとったものである。朋来園を訪れた学者文雅の士の一人として、清の学者呂宏昭がある。呂宏昭は朋来園の三字を揮毫して贈った。三字は篆刻されて朋来園の偏額としてかけられたが、今も森島家の家宝として残されている。寛政四年（一七九四）九月のことである。

学徳を慕う多くの高名な文人の来訪は弥十郎の名を高めることとなり、好学有識の士により、子弟教化の懇請となり、弥十郎に自適の生活を許さなかった。其進自身も、意を決するところがあり、朋来園はほどなく学徒の入門を許し、そのまま学舎となった。こうして朋来園は官学の興譲館や寺子屋無事庵に先がけて、谷村における教育の黎明としての学塾として開校されたのである。

朋来園での授業内容、学習規則等も記したいが、紙数の関係で割愛する。また、後妻を迎えたこと、雲室を江戸光明寺の中興開山として晋山させたいきさつなどと共に割愛し、『甲斐国志』とのかかわりについて述べる。

甲斐国志と其進 寛政十年（一七九八）、甲府勤番支配として滝川長門守利雍が赴任した。利雍在任中の同十一年（一七九九）は林大学頭衡の建議にもとづいて、甲斐の地誌を編纂することを利雍に命じた。利雍は国中三郡は、甲府学門所教授富田武陵、都留郡は弥十郎を起用し、編纂にあたさせた。しかし、編纂事業は遅れ、とりかかったのは享和三年（一八〇三）であった。しかも緒についたばかりの文化二年（一八〇五）七月には西丸小姓組番頭として離任し、国志編纂は一たん頓挫するのである。

しかし、事業は幕府の内命を受けて着任した後任の甲府勤番支配松平伊予守定能によって受継がれていっ

た。

松平定能は着任早々この事業にとりかかったが、調査陣容などは全て一新し、新規まきなおしの体制をした。すなわち、総裁には自らが当り、編纂の主任に巨摩郡西花輪村長百姓内藤清右衛門禹昌、都留郡主任に下谷村長百姓森嶋弥十郎其進、国中三郡編集に巨摩郡上小河原村神主村松弾正左衛門善政をあて、これら三名が編集の中心格となり、定能家臣と甲斐国の有識者を、手伝いあるいは助手として任命したのである。この中に瑞穂村の渡辺与九郎や小沼村の神主小佐野和泉守景敬等があった。

翌文化三年（一八〇六）正月、定能・清右衛門・弥十郎・弾正左衛門の協議によって甲斐国志編纂調査項目が確定し、二月一日に甲斐全村の名主長百姓宛に廻章をもって国志編纂のことと調査内容を知らせる急触れが出された。かくして、新体制のもとに調査が開始され、編纂がはじまったのである。

狭小国とはいえ、交通通信の発達していない時代であってみれば、地理的な条件からも当初より、山梨・八代・巨摩三郡と都留郡の担当区分がなされたのは止むを得なかったであろう。調査内容と、編纂要項に従って、都留郡は、国中三郡とは全く別個に弥十郎宅を編纂所として調査編纂し、調査部門の編纂が終ったところで、例えば都留郡の山川部は国中三郡の山川部のあとに付けるという形で改めて編集されたのである。したがって、どの程度の内容で、どのような文体で記述すべきかは当然打ち合わせが行われたと思われるが、国中三郡と都留郡とを比較すると、村里部の記述量一つみても両者に大きな差があることがわかる。総じて国中三郡に比べて都留郡の方が詳細に記述され、特に山川部は最も力を注いだものと思われる。また、提要の道路関梁では大月富士吉田間が極めて簡略に記されているが、草稿でみる限り、比較にならないほど詳述であるのを知ると、道路のように三郡と区別できないつながりをもつものは、最終編集において大鉦^なが振るわれたものと思われる。

調査の基本となったものは、村々から提出された村明細帳と絵図であった（村明細の類は散じて諸家に残されたものが一部留められているに過ぎないが、絵図六七枚は森嶋家に保存され、草稿類と共に昭和五十一年都留市に寄贈されたものである）。絵図と村明細帳にもとづいて調査が緒についたばかりの文化四年に（一八〇七）、松平定能が西丸小姓組番頭に任ぜられ、甲斐国を去ったことにより、編纂は困難さを増した上に、弥十郎は、より完全なものを求める性格上、考証傍証を重ねるために進行状況は計画を大幅に上廻るものとなった。定能から矢のような督促が寄せられる中で、文化八年国志編纂事業成就を願って、祖先の在所、加畑村の氏神小御嶽神社に石段と灯ろうを寄進し、さらに門人等は上谷村の学神天神社へ大願成就の願をかけ、石灯ろう一對の献灯をしたのである。

まとめられた草稿は次々と江戸の松平定能邸に送られ、内藤清右衛門の草稿と合され、それぞれの部門毎に編集されていたが、士庶部に及ばぬうちに編集が打ち切られ、文化十一年（一八一四）十二月十六日、一二四巻にわたる甲斐国志は、七一冊に仕立てられて幕府へ献上されたのである。いま士庶部は甲斐国志草稿として都留市に蔵されているが、甲斐国志幻の一巻として残るものである。

『甲斐国志』は、松平定能の私撰とされているが、このように実際には、都留郡は森嶋弥十郎を中心とする人々によって編纂されたものである。それにもかかわらず、当時の慣習によって、序文にも本文中のどこにも弥十郎の名は勿論、内藤清右衛門の名さえも一字たりとも見出せないのである。

其進は文政四年（一八二二）十月十三日六〇歳をもって世を去ったが、無二の親友僧雲室は、弥十郎の墓参に際し、「森嶋子与を祭る」という祭文を表わし、弥十郎が国志編纂に従事し、献上したことを述べ、また、朋来園の門人たちは師の徳を慕い、文政八年（一八二五）専念寺に弥十郎の顕彰碑を建てにあたり、碑文を林大学頭、書を市川米庵に依頼して墓表を建立した。その文中に、松平定能が国志を撰んで幕府に献じたが、子与の力が大であったことを記してあるので、わずかに国志編纂が弥十郎の業績であることを伝えているのである。